

編集後記

- 平成20年4月5日に文化財石垣を保存する技能を次世代に継承するために「文化財石垣保存技術協議会」が設立された。その「文化財石垣保存技術協議会」を保存団体として、「文化財石垣保存技術」が文化財保護法の規定に基づいて選定保存技術に選定された（平成21年7月17日答申、9月2日告示）。長く取り組まれてきた石垣保存技術の活動が階段を昇ったこの節目において、日本遺跡学会では平成21年度大会を平成21年11月29日（土）及び30日（日）に開催するに当たって、開催地を「文化財石垣保存技術協議会」の事務所である日本城郭研究センターが所在する姫路とし、「文化財石垣保存技術協議会」の研修会と合同開催することとした。そして、そのテーマを「近世城郭の保存とまちづくり」として、石垣の保存技術の継承と新たなまちづくりの視点などを展望した。開催準備においては、学会幹事の粟野隆が奈良と姫路との間を幾度となく往復してその調整に当たり、結果、多くの参加者を得て首尾は上々であった。
- 本年は、国連生物多様性年（International Year of Biodiversity : IYB）であり、折しも10月18日から29日まで名古屋国際会議場において、生物多様性条約締約国会議が開催され、日本が「SATOYAMA イニシアティブ」を提案した。このように人と自然とのインタラクティブによって育まれてきた里地里山のノウハウにいま世界的な注目が集められているが、本誌上の特集を見れば、それは縄文の文化が生み出したものである証拠がいくつも示されている。日本において遺跡に関する取組はこの1世紀余りにわたって広く発展してきた反面、膨大な数の遺跡が失われていったが、危機的な現代の状況において、この1世紀の間に私たちが忘れてきたものに気づかせてくれるのは、やはり遺跡である。
- 今年の夏、第34回世界遺産委員会が開催されたブラジルで、世界文化遺産「ゴイアス歴史地区」を訪れる機会を得た。かつてはゴイアス州都であったが、いまは17世紀以来の古い町並みが遺る静かな田舎町である。ブラジルでは主に建築の専門家から成るIPHAN（国立歴史遺産研究所）が文化遺産の認定と保護を担っている。町なかを流れるヴェルメルホ川の河畔で何やらトレンチのようなものを掘っていたので、IPHAN現地事務所を訪ねて聞いてみると、駐車場を造成するのに事前の発掘調査をしているという。関係する部局がIPHANにあるものかとさらに尋ねると、発掘調査については必要に応じてIPHANが民間に委託するとのこと。現場の様子を見たいと思って行くと、MARSOUという発掘調査や建設業などを手がける民間会社の現場監督がとても歓迎してくれて、町外れのフォンチ・ダ・カリオカという少し大きな現場に連れて行ってくれた。日本より調査が幾分かざつに見えたというのはまったく失礼な話かも知れないが、それでも、地球の真裏でも埋蔵文化財の意義が周知され、その基本的なスキームを同じくし、かつ、熱意をもって発掘調査に取り組む様子を見ることのできたのは予定外の喜びであり、遺跡というものの普遍性を改めて強く感じた。（T.H）
- 第7号では「近世城郭の保存とまちづくり」（特集1）と「縄文の遺跡と文化」（特集2）の特集企画を設けた。
- 特集1「近世城郭の保存とまちづくり」は、平成21年度全国大会第1日（平成21年11月28日、於：姫路市男女共同参画推進センター「あいめっせ」）における2つの特別講演、第2日（平成21年11月29日、於：姫路市文化センター小ホール）におけるシンポジウム、すなわち、基調講演と5つの報告、そして総合討論の記録である。
- 特集2「縄文の遺跡と文化」は、学会誌編集委員の平澤毅が企画立案と取り纏めを担当し、誌上の特集として新たに構成したものである。昨年末からの企画準備段階において、本誌編集委員をはじめとして、関係各方面に打診・相談の結果、本誌上において21本もの論考を擁する大特集を組むことができた。
- 「研究論文」については3本の投稿があり、これらをすべて掲載することができた。それぞれ2名乃至3名の査読者による校閲及び編集委員による修正等の適否の確認を経て掲載を決定したものである。
- 「冒頭グラビア」、「遺跡の現場から」には、遺跡をはじめとする遺産に関わるそれぞれの立場から様々な情報等を発信することとしてご寄稿いただいた。依頼に際しては、特に上記特集との関連に重点を置いた。
- 表紙の作成には中村一郎氏（奈良文化財研究所）の協力を得た。
- 本誌の編集・校正等においては、平澤毅が統括し、各編集委員と連絡・協議の上、事務局の杉本陽子・楠本侑子両氏が諸作業・事務連絡等に当たった。

本誌の編集においては、編集委員が幹事会及び運営委員会において各種企画の検討状況などを随時報告し、協議を行った結果を踏まえて進めた。関係各位には多大な御理解と御協力を賜り、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

学会誌編集委員 粟野 隆・坂井秀弥・清水重敦・平澤 毅・増渕 徹（50音順）

遺跡学研究 第7号 2010

発行日 2010年11月20日
発行者 日本遺跡学会
〒630-8577 奈良県奈良市二条町2-9-1
奈良文化財研究所 文化遺産部 景観研究室内
TEL 0743-30-6816 FAX 0742-30-6815
E-mail iseki-g@nabunken.go.jp
印刷所 能登印刷株式会社